

小説『 大地の星、天の磐 』

高橋 政和

奈良県山添村に存在する無数の巨石群に秘められたメッセージ。
連載小説。全三回予定、第二回。

登場人物紹介

大田道彦（おおたみちひこ）

奈良総合科学大学のサークル「大和わびさび研究会」の一年生。長身猿顔であだ名は「秀吉」。数少ない車持ちのためよく足にされる。

天野礼子（あまのれいこ）

同一年。美人だが変人。奈良県山添村の巨石群に興味を持ち友人の助力を得ながら調査を開始。

藤原望（ふじわらのぞむ）

同一年。スポーツ万能だが無愛想。礼子達の言動に興味を示し、行動を共にする。

手塚雄矢（てづかゆうや）

体重百キロを超す巨漢。サークル一年生のリーダーを自称する。山添村に出張アルバイト中。

稲田（いなだ）

サークルの先輩。院生。

羽田有姫（はたゆうき）

山添村で手塚が出会った謎の美女。

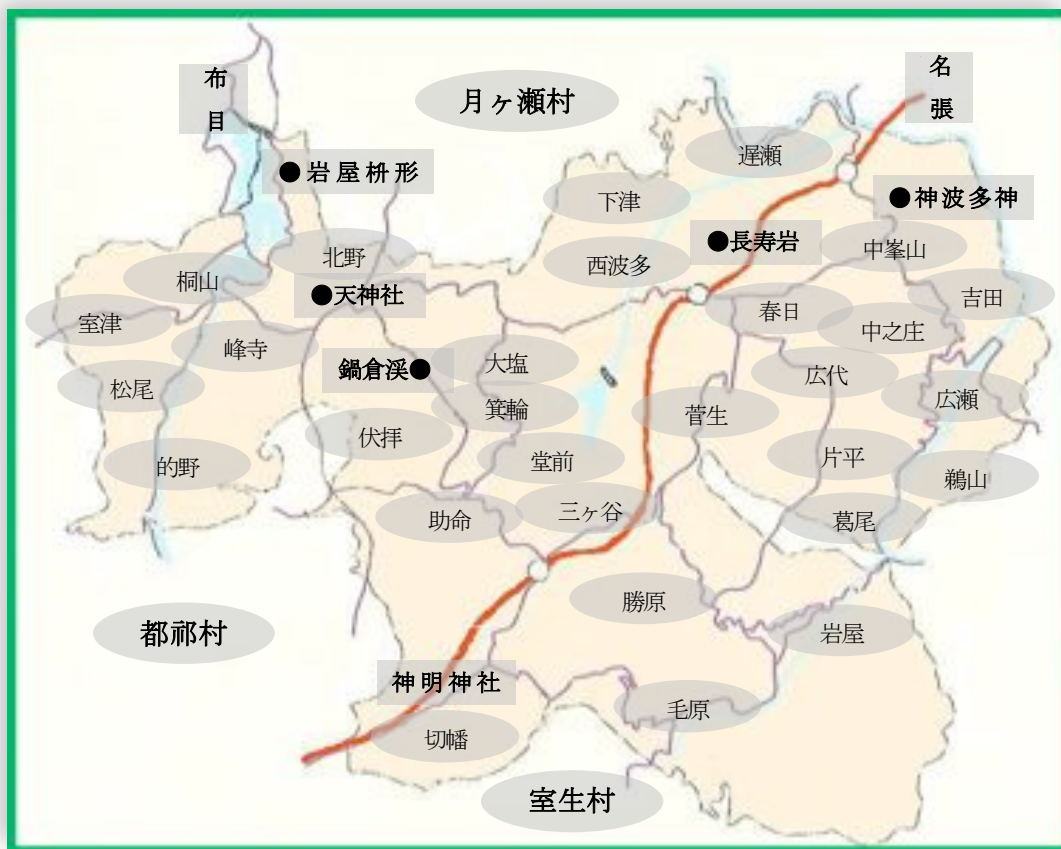
10

屹立する枡形岩が朝の陽光を鏡のごとく照り返していた。壁と見紛うほどに広い平面が山麓を見下ろしている。

山添村北野地区の北端の山中。藤原は一人山腹でこの巨石を見上げてたずんでいた。夏の暑い盛りだが、山歩き用に幾分厚手の服装をしている。

ここにあるのは巨石が数多く存在する山添村でも最大級の巨石岩、岩屋岩と枡形岩。岩は十五メートル以上にも及ぶ高さを誇り、人の手の容易に届かぬはずの高所に枡形の穴がうがたれている。名の由来である。穴には岩屋岩の大日如来を刻んだのみと槌がしまわれた、という伝説がある。道具はもはや失われたが、枡形岩の枡、岩屋岩の大日如来は現存する。

巨石の発する静かな迫力を見るものを圧倒し、動かぬはずのそれは今しも覆いかぶさってきそうな意思を感じさせた。



山添村略図

藤原はリュックサックから取り出したペットボトルの蓋を捻り、茶で喉を潤した。陽光がペットボトルを照らし、その光はまた杢形岩で照り返されている。

羽虫が周囲を飛び交っているが藤原は意に介さない。と言うよりも彼の周囲に障壁を張り巡らせたように、虫は一定以上の距離を保って彼に近寄ろうとはしなかった。それは巨石からの見えないエネルギーをはねのける藤原の意思のようでもある。一人で山中で巨石に出会うとき、人は誰しも多少はおののく。だが彼はそのような気配を微塵も感じさせない。ただ無言で自分の背丈の十倍近くもある巨石を観察していた。

しばらく巨石を見上げていた藤原だが、微笑して視線を落とす。

——巨大すぎる……。

例えば今ここでこの巨石が倒れてきたら、いかに敏捷な彼といえども一たまりもないだろう。人間とは本当に小さな物だ。

砂利を踏む足音がかすかに聞こえた。耳ざとく彼はそれを察し、視線を山の下方に向ける。背の高い草木がほ

うぼうに生え視界は悪いが、道筋は限られているため、もし誰かがこの場面上がってくればその姿をとらえる事は容易だ。足音は次第に大きくなり、男が藪の影から姿を現した。藤原はその男の姿を見て眉をひそめた。

その男は夏の酷暑の中にも関わらず、上下ともにダークのスーツを着ていた。上着も着たままだ。のみならずサングラスに黒の革靴。およそ自然の中を散策する格好ではない。年のころは二十代後半から三十代。短い髪をビジネスマンのように整えているが堅気の人間とも思えない。

男が藤原の存在に気がついた。そして立ち止まる。

一瞬お互いに身構えるような姿勢を見せたが、すぐにその緊張を解く。双方同じ事を考えた。

——腕が立つ。只者ではない。

この平和なご時世に物騒な思考回路を持つ人間が二人も集う事は稀であり、滑稽とも言えた。それぞれ無愛想と職業病の理由から、微笑むような事はしなかったが。

男は会釈して近づいてきた。そして周囲を見回す。妙なことにその顔には

失望の色が見えた。藤原が会釈を返すとダークスーツの男は懐から写真を一枚取り出した。

「すまない。こういう人を見なかっただろうか。羽田というが」

写真にはショートカットの女性、それも相当の美人が写っていた。二十代前半と言ったところか。藤原は写真を返すと首を振った。彼には心当たりがなかった。

「そうか……」

男は落胆の様子を見せ、写真を懐にしまった。

「見かけたら人が探していたとお伝えしておきます」

「いや、それはいい。すまない、忘れてくれ」

もう一度会釈をして男はそのまま山を降りていった。ここまで上がってきたのなら、少しは岩を眺めるなどしても良さそうだがそのような様子もまったくない。

藤原は男の反応を妙だとは思ったが、それを顔に出すことはしなかった。男の姿が見えなくなり彼が岩を振り返る頃には、既に男は思考の埒外に置かれていた。

ただ山腹にそびえ立つ巨岩だけが、小さな人間二人の奇妙なやり取りを静かに眺めていた。

この山の名を、牛ヶ峰という。

11

運転する道彦は小さな頭痛を感じていた。それが昨晚の酒による物か、助手席に座っている女性のためかはわからない。

昨晚は予告どおり試験の打ち上げと称する飲み会が行われ、結局朝方までつき合わされた。隣りに座る女性も同様に打ち上げには参加していたはずなのだが、午前九時にはうれしそうなお声で「山添に行くよ」と電話をかけてきている。どこまでタフなのだ？

助手席に座る女性は天野礼子である。

車に乗ってからも一人元気で、山添村の巨石をいろいろ見て回ろうと言いつつ、あれやこれやと巨石の名前を挙げては喜んでた。道彦はそのすべてに生返事をしていった。

「どうしたの、元気ないね」
「……うん。疲れてるんだ」



「まあそんなことはどうでもいいのよ。今日はどこから来る？」

しばらく大口をあげた後、道彦はため息をついた。またいろいろと言いたいことはあったのだが姫は別の話題をお好みらしい。

「なぜ神野山の巨石群に隠された謎を解きたいのに、神野山以外の巨石も見て周らないといけないんだ？」

「そこよ」
人差し指を立ててしめつけつつらしい顔を礼子はしてみせたが、気分が悪

いので道彦はあえてそれを見ないようになっている。

「山添村には巨石は無数にあるよね。それこそ星の数ほど。巨石は目立つ

確かに巨石は山添村に隠された一つの大きな謎の鍵を九十パーセントまで握る存在かもしれない。けれど残り十パーセントは恐らく別にあると思うの。この謎は複雑に隠されている。だからこそ千年を超えるレベルで残っている。そんな気がするの」

「へえ……そんなもんかね」
「ところで道彦」

急に本名で呼ばれて道彦はうろたえた。

「何だ急に」
「ちゃんと運転してね。道彦はこの山添村に隠された大きな謎。もしそれを解く為のキーワードがあるとすれば

一体それは何だと思う？」
道彦は眉間に強くしわを寄せた。突然の質問ということもあるが、その質問を受けた自分の意識内でめまぐるしく様々な言葉が周遊を始めたからだ。

石、磐、神、星、天、水、川……
「どう？」

写真：毛原八坂神社にて

「……牛」

「牛？」

「質問をした礼子の方が驚いた。」

「牛が今回の謎を解く為のキーワード？」

「知らないよ、そんなの。何となくそう思っただけだ」

「そう……。私はやっぱり星、だと思つてただけだ」

「ああ、星もそうかもな」

「礼子は満面の笑顔を浮かべた。道彦の何の根拠もない答えに満足したようだった。鼻歌を歌いかけた礼子がふと後部座席を見て言った。」

「ところで今日藤は？」

「今日は歩いていくんだとさ……」

「歩いて？ 山添まで？ 本気で？」

「道彦は黙って首を捻った。礼子は爆笑した。」

「え、嘘でしょう？ 山添までつて結構あるよ？」

「さあ。電車で大回りして名張に出てから歩いていってるのかも」

「自分で言いながらそれは無いだろうな、と道彦は思った。実際その直感」

「は正しい。」

「何なのあいつは？ 修験者？」

「求道者であることは間違いないだろうな……」

「こういう時、道彦は口には出さないがいつも思うことがある。」

——変人が多い……。

もちろん隣りで笑い続ける女性も含めてである。

小さな川が流れている。川の向こうには生い茂る木々が森を形作っている。

12

川には真新しい橋がかかっており、その先には小ぶりの鳥居。

山添村は大字切幡 神明神社。

橋の上に一人の女性が立ち、玉砂利の敷き詰められた参道を見つめていた。髪は短く巨元は涼やか。

その女性、羽田有姫は手元に持ったパンフレットをポーチの中に仕舞い、歩き出した。

掃き清められた境内の空気は、夏の酷暑を忘れたかのように冴え冴えと冷えている。

人影はない。玉砂利を踏む足音に反応したのか、どこからともなく子猫が

数匹現れた。一匹が有姫の足元にまとわりつき、小さく鳴いた。

有姫はその場にかがみこんで子猫に手を差し出した。

「まあかわいい……。君は野良？」

「あいにく餌は持つていない。猫はしばし手の匂いをかいでいたが、何ももらえないと分かると顔をふいとそむけて去っていった。」

有姫は立ち上がり、立ち去ろうとする猫の後姿を見つめた。

「いいね……。君は自由で」

目を伏せ、改めて歩き出そうとした有姫の背後から大声で彼女を呼ぶ声がした。

「羽田さん！」

驚いて振り向くと、大柄な男が全速力で走ってくるのが見えた。鈍重そうな見かけの割に随分とすばやく、かつうるさい。

静寂を乱す闖入者の気配に驚いた猫達が興奮して喚びだした。男、言うまでもなく手塚は立ち止まる有姫に追いつくと大きく肩で息を吐き出した。

「は、は、羽田さん！」

有姫は苦笑いしていた。

「こ、こんな所で何を？」

「昨日はどうもありがとうございまして、手塚さん」

溝に単車の前輪をはめて困っていた有姫を、たまたま通りがかった手塚が助けたのはつい昨日のことだ。

「いえいえ、そんな！ 当然の事をしたまでです。」

「あ！ 散歩ですか、羽田さん！ 一緒にして良いですか！」

「今日はお仕事は大丈夫なのですか？」

「あ、えと仕事は。ちよつとくらいなら大丈夫です」

有姫は少し驚いた顔をしたが、すぐに微笑んだ。

「ではご一緒しましょうか。ちよつとだけ」

有姫は片手を進路に向け、ゆっくりと歩き出した。手塚も横に並んで歩き出した。既に手塚は天にも登らんばかりの心境である。

山添村に存在する他の多くのどこか無骨で削りつばなしの神社や磐座と異なり、切幡の神明神社は洗練された空気を持っている。白い玉砂利の敷き詰められた参道は鳥居から社まで

伸びている。赤い社に紅い鳥居。神武天皇に伊勢神宮の遥拝所。小さな社を配した小島を浮かべる人工の池。そこに磐座は存在しない。

ここで祀られているのは太陽神、オオヒルメノミコト。別名を天照大神。手塚は最初せわしなく話しかけようと努力していたが、有姫が静かに歩くことを望んでいる様子なので、それに気づいてからは黙って後をついて歩いた。時折落ちた木の枝などで即興の芸を見せては、そよ風のような微笑をもぎ取っていた。

神社全体から受ける印象を言葉にするならば、ここは切り開いた土地を浄化するための要となる聖地であった。

会話は少なかったが手塚は神社を散策する間、幸せの絶頂であった。彼女もきつとそうだと思いい、顔を覗き込んで苦笑を買っていた。天野礼子などという小娘とは女の器量として歴然の差がある、そう彼は思っていた。

二人は境内をぐるりと巡り、神社の鳥居を出て境内の前を流れる川のほとりにたたずんだ。先ほど有姫が一人

で立っていた、白い石でできた真新しい橋。

「天津川……」
有姫は橋に刻まれた川の名前を口にした。

「綺麗な名前ですね！ いやいや羽田さんの美しさには敵いませんが！」

有姫は苦笑して振り返った。

「ありがとう、手塚さん。……ところでもう行かなくて大丈夫ですか？」

「いけね！ 配達を頼まれていたんだった」

有姫はくすりと笑った。

「羽田さん！ 今はこちらと時間がありませんが、次にお会いしたら言いたい事があります！」

「え……」

「では次回、あの場所でお会いしましょう！」

言うが早いか手塚は突風のように立ち去ってしまった。

取り残された羽田は少し複雑な表情を見せた。

あの場所とはそもそもどこの事なのか？ 有姫は最大の疑問を反芻しながら橋を渡り、歩き出した。煙草をくゆらせていたタクシーの

運転手が、有姫の帰還に気がつき、大袈裟に会釈をしてみせた。

一方手塚。有姫の微笑にはどこななく陰りがあつたが、その陰りに気づくにはまだ彼は若すぎた。ただその美貌に完全に骨抜きにされている。

坂を上がり、ゆるやかなカーブを曲がる。しばらくして手塚は舌打ちをした。舞い上がってしまい、連絡先を聞くのを忘れていたのだ。

また最初に出会った店に行けば会えるだろうと気楽に考え、後は鼻歌を歌って走り続けた。

牧場に戻った手塚は、雇い主から遅くなったことをこっぴどく叱られた。

13

大きな台石の上を礼子が風を感じるように歩いている。

彼らは名阪国道山添インターチェンジに程近い、山添村大西のふるさとセンターに来ていた。ふるさとセンターには長寿岩と呼ばれる巨石がある。礼子たちと藤原はこの長寿岩で集合した。結局藤原がここまで歩いてき

たのかどうかは恐ろしくて道彦には聞けなかった。藤原がここにつくなり腕時計でタイムを確認していたのが気にはなつたが。

長寿岩はこの山添村で見えてきた岩の中でも、最大クラスに属する丸石だった。岩の周囲よりも一回り大きな台座を設けられ、その上に居座っている。駐車場の脇に置かれているので、周囲の車と大きさを比較すると更にその巨大さが際立つ。

「大きいな」

道彦は自分の軽自動車にもたれながら嘆息した。身長一メートル九十近い彼ですらも見上げる威容だ。

「長寿岩。これ自体は古くからここに祀られていたわけではなさそうだな」

巨大な丸石の説明版を読んでいた藤原が顔を上げて言った。

平成七年に落成したこの村内最大の公共施設では、その工事中、土中より比類なき巨大な二つの岩が出土したと言う。一つは現在長寿岩と呼ばれる村内でも最大級の石球。今一つは、その長寿岩の上に乗せ、自らは台座の役割を果たしていた平らな大岩。工事の最中、それらはただの邪魔者でしか

なく、台座となっていた大岩は惜しくも爆破されてしまったという。そして長寿岩も爆破されるところであったが、寸前にストップがかかり、その後ふるさとセンターの落成後は村のシンボルとしてこの地に鎮座されている。

「まあ地面を掘っていきなりこんなのが出てきたら確かに驚くだろうな」

道彦がつぶやいた。礼子は少し離れた場所を歩いている。自然その言葉は藤原に向けられた物となった。眉をひそめて藤原が答えた。「この山添村は村内のどこを掘ってもこういう岩が埋まっているのだから。それは地質学的な問題であって、人間の意志の及ぶ所ではないと思うが」

「奈良はどこを掘っても遺跡が出る、と言っしなあ」

「遺跡とは違う」

道彦は礼子をちらりと見た。いつの間にか踊る事をやめた礼子が興味深そうに聞き耳を立てている事がわかった。

まあその辺の議論はできれば君ら

が二人で好きにしてくれ。道彦は少し話題を変えた。

「例の巨石の分布図を見たけど、その地質学の話で行くと一つ妙な事があるんだ」

藤原が怪訝そうな顔を向けた。

「どういう事だ」

「いや、確かにこの山添村にはちょっと異常なほど、いわれや名前のある巨石が多い、という事はわかるんだけど、逆に全くそういう巨石が存在しないゾーンがあるんだよな」

「具体的にどの辺りだ？」

「切幡地区なんかさうかな」

道彦は地図を取り出し、山添村の南部地域を指し示した。逆三角形のような形の山添村の南部地域は、西から切幡、毛原、岩屋と大字が変わっている。確かにその地図上では山添村南部地域、特に切幡の巨石の事例が少ないように見えた。

藤原は地図をちらりと眺めたが別段不思議そうな顔もしない。

「切幡に巨石がない事も単に地質学的な問題で、山添村を中心に産出する巨石群が、村の南端に当たる切幡から南にかけては産出しなくなる、という

ことではないのか？」

「ところがそれも言えないのよ」

黙って会話を聞いていた礼子が長寿岩の台石から飛び降りて話に加わった。

「山添村の南には切幡を越えれば都那村が、毛原、岩屋を越えれば室生村が存在するんだけど、その両方の村にも少なからず、名前やいわれのある岩が存在するのよ。そのほぼ中心にあるはずの切幡が、なぜか巨石が存在しないゾーンになっている……というわけ」

藤原は腕組みを崩し、鼻先を撫でた。礼子の答への論理性を確かめるようにしばし黙考し、目を伏せた。

「まあいい」

決して満足はしていない様子だが、この場合はこれ以上議論にならないと判断したのである。

「まあ、神野山に隠されていた巨大な天球図の発見はそれだけで大きな一歩よ。千年以上、誰も気づかなかった謎なんだから」

礼子が足元を払って歩き出した。「さてと。助さん、格さん。行きますか」

「天野」

藤原が腕組みのまま、礼子を後ろから呼び止めた。礼子が振り返る。

「この山添村の巨石群に何らかの謎が存在するとして、その謎がお前ことき小娘の手におえる物と思うのか？」

「……私一人の力では到底無理でしょうね」

道彦は少しどきりとした。しばしの沈黙の後、藤原は言葉を続けた。

「本気で解く気か？」

礼子はすぐには答えず、ただ空を見上げた。微笑んでいる。構わず藤原は言葉を続けた。

「三日だ」

礼子の顔から微笑が消え、まっすぐに藤原を見つめた。

「今日から三日以内に謎を解け。のらくらと話を伸ばされても俺はそれ以上付き合えん」

しばらく礼子は藤原とにらみ合った。道彦が声をかけようにも二人の間は一触即発で、間に立つ事すら恐ろしい。

ややあつて礼子がにやりと笑って姿勢を崩した。



写真：中峯山『舟岩』

「いいよ。三日ね」

道彦は驚いた。数千年の間解かれる事のなかった謎だ。今その謎の難しさを自分で強調したばかりではないか。礼子は道彦の思いを知ってか知らずか、呑気に両手をひらひらと踊るように泳がせている。口笛すらも吹いていた。

「七夕だね……」

「え？」

道彦は礼子の言葉に意表をつかれた。

「三日の後には旧暦七夕。期限を区切るにはちょうどいいかもね。別に自信があるわけではないけど、これも何かの縁でしょう。三日後の旧暦七夕の夜までに、神野山に描かれた地上の天球図の創設理由、それに何らかの解答を示す事を約束するよ」

羽田有姫は一人、山添村の東方に位置する中峰山のふもとにたらずんでいた。目の前に割れた巨石が横たわっている。

14

舟岩。かつて名張川をさかのぼってこの地に鎮座することとなった牛頭天王が乗ってきたと言われる舟が、長い年月の間に岩と化したという伝承がある。

神々が乗ってきた舟が岩になってしまったという説話は全国的に広く見られる。岩舟信仰と呼ばれる物で、京都の貴船神社にある船岩などが有名である。貴船の名の由来も、貴い人が乗ってきた船と言われる。

ここ中峰山の舟岩は相当に巨大なクラスになる。横渡りはざっと十メートルほど。

風が起ると、舟岩の合間から生えた巨木がまるで帆のように大きくたわんだ。

トルほど。

前髪を押さえる有姫の背後に、ダークスーツの男が立った。

「探しましたよ、お嬢様」

有姫が振り返ると、男は吹き出る汗を拭おうともせずただまっすぐに彼女を見つめていた。

「黒田……！」

有姫は最初狼狽し、その後観念したかのように目を伏せた。背後から船の帆がはためく音が聞こえた気がした。

黒田のスーツは濡れた鴉の黒羽のようだった。

15

一人で中峰山に向かった女性が、ダークスーツの男に連れられて山から降りてくる一部始終を藤原は見下ろしていた。彼は最初不穏な空気を感じたが、女性が存外に大人しく男に従っているようにも見えたため、特に行動を起すことはしなかった。どうやら男は探し人に会えたらしい。その事の是非は彼にはわからないし特に興味も無い。

筒状に握り、左目に当てていた拳を彼はゆつくりと下ろした。

「何見てんだ？」

「いや……」

中峰山の神波多神社。

藤原は高い石段の一番上の端に立ち、下界を見下ろしていた。

巨石を切り出して造ったという長い石段を登った先には、神波多神社の広い境内が待っていた。藤原は一人無言で、本殿の周囲を左回りに歩き出した。礼子と道彦は藤原に代わり、しばらく高い石段から村を見下ろしていた。自然藤原と別れる形になる。

ふもとでは例の一组の男女がタクシーの運転手と交渉し、停めてあった自分達の車に乗り込もうとしていたが、彼らは特にそれを気に留めることも無かった。

「神波多神社というのは、あまり聞かない名前だな」

道彦が思った疑問を口に出すと、すぐに礼子が答えた。

「この辺りは元、波多という地名だったみたいね。そのバス停にも書いて

いる。神波多神社は文字通り、波多の神様を祀る神社だよ」

「へえ……その波多の神、というのは具体的に何という神様だい？」

「この神社の祭神はヤマタノオロチ退治で有名なスサノオの神。だけれどここでは、そのスサノオと同一視された牛頭天王のことでしょうね。牛の頭を持つ神様」

道彦が眉間にしわを寄せた。

「こう言っただけで、また禍々しいお姿の神様なんだな」

礼子が笑った。

「牛頭天王はここだけではなく日本各地で祀られる神様だけど、その性質は疫病の神様と言われているんだ。禍々しい姿をしているのも当然かもね」

「なるほど……。日本の神様には全て、人型というイメージがあったよ」

道彦がよくわからない顔をしながらも、うなずいてみせた。

礼子と道彦は藤原と反対方向に、本殿の周囲をゆつくりと歩いていた。

本殿と摂社は一続きになっており、その向かいには大きな社務所が存在する。社務所の入り口には奉納された

絵が多く存在したがそれらの多くは朽ち果てており、古い歴史を感じさせた。

「そう言えば神波多神社の絵には面白い話があつてね」

「ん」

「絵を抜け出す牛の話が残されている」

昔、一人の絵師が一夜の宿を求めて村を訪れた。しかし絵師はその身なりのみすぼらしさから、宿をどこでも断られ、やつとの思いで中峰山のとある村人に泊めてもらえらることとなった。絵師は一夜の宿のお礼に、牛の絵を描いて残した。絵師が立ち去ると、夜な夜な村では田畑が食い荒らされる被害が出るようになった。村人が夜、田畑を見張っていると一匹の野良牛がやってくる。牛は田畑を荒らした後

絵師の描いた絵に戻った。

そこで村人は話し合い、牛が絵から抜け出るのは牛がつかれていないからだと言論を出した。村人は絵師をやつとの思いで見つけ出して戻ってきてもらい、絵に牛をつなぐ紐を描き足してもらった。その夜から田畑の被害は出なくなった。

絵師は当時一級の絵師と呼び声高い、狩野法眼元信であったと言う。絵は神波多神社に奉納されたと伝えられる。

「へえ。で、それがその絵なんだ」

「それが……」

遠巻きに本殿を見ていた二人に、本殿の奥から藤原が呼ぶ声が聞こえた。礼子と道彦は顔を見合わせ、駆け出した。何かを見つけたらしい。

二人が着いた先は本殿の左側で、藤原はそこで一人立ち、社の屋根の下を



写真：神波多神社摂社『牛の宮』

指差していた。そこには木製の扁額があり、薄く書き残されていた文字は『正一位 牛頭天王』

「これは大分年季が入ってるな」

道彦がもつとらしくうなずきながら言った。牛頭天王の頭について

『正一位』の言葉が気になり、疑問をそのまま口に出した。

「どんな由来があるんだろう」

礼子がすぐに返答した。

「さつきも言いかけたんだけど、天正九年。ええと」

「一五八一年」

「そう。秀吉詳しいね」

「歴史は好きなんだ」

「ありがと。その一五八一年に織田信長の起こした伊賀の乱の際、戦火に遭って、詳細な記録が残されていないの、この神社には。当然、さつきの牛の絵もね」

道彦が唸ると、藤原が代わって答えた。

「だから狩野元信などという比較的新しい人物にまつわる伝承しか残っていないのかもしれないな」

「藤、なぜその話を知ってるんだ？」

「お前らの話は大体聞こえていた」

「怖いな、なんて耳してんだ」

藤原は無表情で何も答えなかった。彼の聴力は確かに常人のそれよりも優れているかもしれない。だがそれ以上に、礼子の声はよく通る。大きくは無いが澄んだ良い声で、静かな空間ならばその声は随分と遠くまで響くはずだ。その喉はかつて、何らかの鍛錬を受けた物ではないかと藤原は思った。しかしその口に出すことは無い。

礼子はひとしきり藤原の聴覚に感嘆の声をあげた後、言葉を続けた。

「ただ正一位というのは朝廷が授ける位の中では最も高い物だね。人間に正一位が授けられることはほとんど無い。人間に与えられた中で有名なのは、岩倉具視、徳川家康、そして豊臣秀吉の三人かな。この神社が朝廷にも聞こえた格式の高い物である、ということでは言えるかも知れないね」

道彦が嘆息していると、礼子が下から指を顔に突きつけてきた。

「あんたも秀吉だけど正一位はもらえそうに無いねえ」

「そのあだ名はやめろ」
道彦が怒った顔を見せると礼子は

笑って逃げ出した。道彦がため息をつつくと、礼子は少し真面目な顔をして戻ってきた。

「もつとも、長い歴史の中で政治や民の生活の混乱の中、本来の意味が失われてしまった可能性もあるけどね。『正一位』という神格に本来の価値が残されているかどうかは実際には怪しい物だけだ」

礼子がどこか寂しげな顔で牛頭天王の名を見上げた。

「野暮は言うな。ここは言葉通りの意味でいいだろう」

突然の藤原の言葉に礼子と道彦は驚いた。藤原は黙って牛頭天王の名が書かれた扁額を見上げていた。気を取り直した礼子は、小さく礼の言葉を口にした。

「ありがと。確かにここは式内社だしね。その歴史の長さに嘘は無いよね」

「式内社？」

「西暦九百二十七年に発布された延喜式にその名が記述されている神社のこと。式内社とされている神社は、その時には既に朝廷にその存在と神格を認められていたということにな

るね。つまりここは確実に千年以上の歴史がある由緒正しい神社なの」

道彦はゆっくりと周囲を見渡した。真新しい彩色を施された社と、朽ちかけた装飾が混在している。長い歴史を持つ神波多神社は今に至るも地元の厚い崇敬を受けていることを感じさせた。

藤原が問う。

「天野。この神波多神社と山添村の巨石群には何らかのつながりがあるのか？」

「まあね。牛頭天王を祀る神社は日本各地に数多く存在する。それこそ数え切れないくらいあるんじゃないかな。でもこの山添村に存在する神波多神社に祀られる牛頭天王はある事情により特別で……。それは波多の天王と別名を与えられ、『親しまれている』と言っても過言ではないこの地の牛頭天王特有の民話。この牛頭天王は村の各地に存在する『巨石』を伝つて、名張川からこの中峰山の地に鎮座したという民話があるの」

「なんだと？」

三人は自然と神波多神社の石段へ向かって歩き出していた。道彦が無言

で歩き出したからだ。何事かを考えている。藤原と礼子は会話を続けた。

「具体的には？」
「まず名張川の水中に沈む釜淵という穴の開いた巨石。牛頭天王は名張川を渡り、そこから山添の地に上陸したそうよ。ここからは中峰山を挟んだ向かい辺りにあるらしいけど。」

その時乗っていた舟は中峰山の山中に残され、長い年月の間に舟岩という巨石になった、という逸話もある。そしてこの波多の地に落ち着いた、ということになるんだろうね」

いわんやその舟岩で、一人の女性が正邪の定かでない船旅に出たことを礼子と道彦は未だ知らない。

初日はこの探索のみで暮れた。

16

ずいといと左手が目の前に突き出される。手の持ち主はどうかやら微笑んでいるようだ。

「お金」

「後輩からも取るんスか？」

「仕事中ですから」
赤紫の幕に囲まれた狭い空間で、貴

重なる空間を削りながら巨漢手塚はサークルの先輩、稲田と向き合っていた。絨毯敷きのテーブル越しに座った稲田は肩の出た薄い紗を羽織り、無数の腕輪をちらつかせている。口元に掛かる濃い紫のベールと頭に巻いた赤いスカーフが優しい稲田の表情を隠していた。丸眼鏡は外しており、少しきつめのアイシャドーがわずかに開いた布の隙間から覗いている。手元の水晶玉に手をかざすがこれは格好だけだ。

彼女は大学に程近いデパートで、占い師のアルバイトをしていた。結構当たると評判で、時給も上がって調子は上々。もともと彼女の場合占いの内容その物よりも、その温和でありながら歯に衣着せぬはつきりとした口調に、リピーターを引き付ける要素があるとも言えた。

「それで？ 何を占って欲しいの？」
 「ずばり、恋愛運です」
 「へえ？ 相手は礼子ちゃん？」
 「失礼な。なぜ俺があんなちんちくりんを」

「失礼なのは君よ」
 稲田はくすくす笑って懐から一組

のタロットカードを取り出した。慣れた手つきでカードをシャッフルした。す。

「具体的に聞きたいことはですね、彼女は何か好物なのか、彼氏はいるのか、どこにデートに行ったらいいのか、とかです！」

「既に恋愛運じゃないわね」

この先輩と話していると口元が緩みつつ放しになる。稲田は微笑したまま一枚のカードを手塚の手元に滑らせた。

「これは……？」

「正位置の『星』ね」

裸の女性が水がめを手に夜空の星の下で眺めている。

稲田はタロットのデッキをテーブルに置くと、煙草を取り出して火を点けた。こちらも最早勤務中の態度ではない。どうせ今日は平日なのでろくに客も来ないのだ。

「占いに必要な相手のデータなんて持ってなさそうだから勝手に君の事を占ったわよ」

「見くびらないで下さいよ！」

「相手の誕生日は？」

「占いの結果を教えてください」

稲田は笑いをこらえつつ、テーブルの上で光を照り返す『星』のカードを一撫でした。

「この場合は『明るい見通し』『芽生え』『解決』……辺りかな。そう悪い結果でもなさそうよ」

「目茶苦茶いいじゃないですか！」

罪の無い満面の笑顔を浮かべる手塚の顔を、稲田も微笑んで見つめ返す。少しか吸った煙草を彼女はすぐにもみ消した。

「そうそう星と言えば……」

稲田は屈み、テーブルの下に置いたかばんの中から一枚のパンフレットを取り出した。

「これ行っておいでよ、手塚君」

「なんスか、これ？」

手塚は稲田からパンフレットを受け取った。パンフレットには『山添村七夕祭り』なる文字が躍っており、何やらきらめく電飾に彩られた巨石群の写真が背景に映し出されている。

「おー！ 何か綺麗ですね！」

「旧暦の七夕の日、山添村の鍋倉溪をライトアップするらしいね。例年、結構評判いいみたいよ。君、今山添村に通っているのでしょうか？」

「そうです！ こりゃいい！」

手塚はパンフレットを両手で抱え持ち、隅から隅まで目を走らせていた。あまりにも希望に輝くその姿。稲田は逆に、小さな不安が胸に芽生えるのを感じた。

「気をつけなよ、手塚君。占いというのは」

「そうかー！ うまく行きそうっすね！」

話をまったく聞いていない手塚の様子に、稲田はため息をついた。

まあこの調子なら大丈夫か……。でも言いかけたことは言わないと気持ちが悪い。

「占いの結果はその時々で簡単に変わるわ。行いが悪いと同じカードでも逆の意味に転じることも多々あるからね。あまり突っ走って足元をおろそかにしないようにね」

「いや、その辺はいいです。今この瞬間にいい結果が出てるといことが大事なんです！ ありがとございませう、稲田さん！ それでは！」

言うが早いか手塚は暴風雨のように去って行った。風圧で入り口のカーテンがばさばさと長く泳ぐ。テーブル

の上の『星』のカードまでが、あおりを受けて引っくり返っていた。

稲田は次の煙草に火を点けて、伏せられたカードを表に向けた。

「逆位置の『星』のカードは『独善』と『失望』……。上手くいけばいいけど」

言つて彼女は煙を一筋、天井に向けて吹きかけた。光るカードは先程と逆の向きを指していた。

17

「ところで牛頭天王の別名としてスサノオの神の名がよく出るが、どういう神様なんだ？」

ミラーを挟んで見える藤原を見つめ返しなが、礼子は無表情で頭をかいた。

一同は手塚と昼食の約束をし、ふるさとセンターに向かっていた。道彦が運転する軽車両は、常人には既にどこかもわからぬ山道を疾駆している。

「日本三貴神の一人、ヤマタノオロチ退治で有名なスサノオは、太陽神である女神天照大神と、月の神である月読の弟。その神格は現在の解釈では暴風

雨を司る神とされているね」

「太陽と月の弟なのに暴風雨の神様なのか」

「そう。だからその辺に納得いかない人たちも多く出るんだろうね。姉たちと異なり、その神性は記紀に明記されていないから。実際には暴風雨の神とはどこにも書いていない」

藤原は腕組みをした。道彦は無言で運転を続け、二人の会話に加わらない。

「生まれ落ちたその時に、既に拳を八つつかむほどの長さの髭を生やし、母の眠る根の国に行きたいと駄々をこね、その涙は海を溢れさせ嵐を呼ぶほどだったんだって。」

その後姉のアマテラスの温情にも関わらず、天界で大暴れの限りを尽くしたスサノオは、天岩戸神話の原因ともなり、神罰として出雲の国に流される。そこで妻となるクシナダヒメと出会い、これを救うためにヤマタノオロチを退治することになった」

「その辺は知っている」

「うん、有名な話だね。八つの首を持つ大蛇ヤマタノオロチは、八度の熟成を重ねた強い酒で酔いつぶれ、スサノオに首を切り落とされて退治される。

その後、草薙の剣を得たスサノオはクシナダヒメを妻に迎え、かの有名な八雲立つ八重垣の歌を歌う。後はオオクニヌシという神様に、日本を統治する役目を渡すまでがその活躍だね。

もつともそのオオクニヌシもいずれ、高天原から天下つたタケミカヅチをはじめとする天津神の軍勢に、その国を統治する役目を奪われてしまうわけだけど。いわゆる国譲りの神話だね。その天津神は元々、スサノオの姉であった天照大神の血筋の物だよ。スサノオの存在は後々の世代にまで影響を残した、というわけ。ざっと話すところな感じだけど」

藤原は礼子の話を反芻するように、鼻に指を当ててゆっくりと何度かうなずいた。

「スサノオが何を表す神なのかと言う謎に対しては諸説様々。いろんな側面を持った複雑な性格の神様でね、一概には言えないのよ。この問題は古代史上の大きな謎の一つとされている。

私は様々な性格を帯びた多重神であるスサノオに大きな魅力を感じるけどね」

「なるほどな」

藤原は走る車の窓から外を見た。話の終わりを感じさせた礼子の口はしかし、次の話題へと続いた。

「ところで」

藤原がその言葉に反応し、視線だけを前方へ送る。

「スサノオの重要な一性格としては外来神ということが挙げられるんだけど」

「どういことだ」

「古代日本朝廷を主に政治の面で補佐した一族に、秦氏という一族がいるの」

「はたし？」

「そう。この秦氏は元々百濟方面から渡来してきた人たちで、大陸の新しい文化や技術を日本に伝えたとされているの。スサノオの神は、元々この秦氏が信奉していた神の名称である、という説があるのよ。その根拠も様々で確たる証拠も無いとされるんだけどね」

藤原が眉をひそめ、礼子に視線を送り続ける。「それで？」と言わんばかりの無言の視線だ。

「でもこの山添村においては、その説を裏付ける一つのある状況証拠が存

在する」

藤原は少し沈黙して考えたが、何かに気がついたように小さく声をあげた。

「そう」

礼子は手を大きく翻した。

「スサノオこと牛頭天王、すなわち秦の神こと波多の天王、だよ」

礼子はルームミラー越しに藤原を見つめた。

「まあ言葉遊びみたいいなもので確たる証拠にはなりえないんだけどね。実際に秦の神様でなくとも構わないよ。ここ山添村では牛頭天王ことスサノオは、波多の天王様でありこそすれ、それ以上の何者でもないしね」

藤原はしばし礼子の顔を見つめ返していたが、無言でその視線を外した。

18

口から泡と共にカレーのルーをほとぼらして手塚がわめいた。

「何でもいから七タについて知っていることを教えろ」

一行は手塚の案内でカレーを食べに来ていた。長寿岩からほど近い飲食

店である。

ただのカレーではない。石焼きカレーだ。石焼きピビンバ同様に、熱された石の器に盛り付けられた米とルーが、混ぜ合わせると弾けるほどに反応する。熱い。しかし旨い。手塚は苦も無く口に運んでいたが、他の三人は冷ましながらでないとしても食べられなかった。

普段、饒舌なのは礼子の役目だ。道彦は自然礼子に視線を送った。が。

「ちょっと私は食べに走るから秀吉代わりにお願い。七夕伝承を知っている？」

「まあ一応は」

道彦は自分が知っている七夕についての話をした。

互いに恋仲となった織姫と牽牛は仕事も忘れて遊び呆ける。それに怒りを為した天帝が二人の間を天の川で引き裂いて、二人は年に一度しか会うことを許されなくなったという内容。恐らくこの国で最も有名な男女の恋にまつわる物語だ。

簡単に話し終えた道彦に対し、手塚は満足げにうなずいた。元々一度は聞いたことのある話のはずだ。すぐに記

憶の中から該当する情報に突き当たったのだろう。

三口ほどカレーを食べた礼子がため息をついて言った。

「要は七夕に関する蘊蓄が知りたいの？」

「まあそうだ。いつもお前らがピーチクパーチクさえずっているあの類の話をしてくれりやそれでいいんだよ」

「いつもながら教わる者の態度じゃないよね」

礼子は苦笑した。

「そんで？ 改めて考えるような事はなかったんだが、なんで年に一度なんだ？ なんで七月七日なんだ？」

「天帝の伝言を伝えたカラスが、内容を間違えて伝えたから、という話もあるらしいな」

珍しく藤原が蘊蓄を披露した。しかし表情はいつもどおり不機嫌なままだ。道彦は吹き出した。

「カラス？」

手塚は素っ頓狂な声で聞き返した。

「ああ。カラスが二人への天帝の伝言をおおせつかったんだが、その時七日に一度だけならば会う事を許す、と言っていたのを毎年七月七日に一度だ

け会う事を許す、と間違えて伝えた……という逸話もあるらしい」

手塚はしたり顔でうなずいた。

「へえ。カラスがねえ。まあ奴らは頭悪そうでもない」

「そうでもない」

道彦が水を一口飲んで視線を集めた。

「カラスは七つまで数を数えられるらしいし、恨みは忘れられない。頭いいよ、奴らは」

「はっ！ だから七月七日なのか？」



写真：三ヶ谷『牛岩』

「さあな。でもカラスが単に伝言の『間違えた』のか、『嘘をついた』のか。案内後者なのかも」

道彦は自分に注ぐ視線を意に介さずカレーを口に運んだ。礼子が問う。

「秀吉」

「ん」

「なぜカラスは嘘をついたと思うの？」

「……改めて理由を聞かれるとわからんけどさ。なんとなくそう思うだけだよ」

礼子と手塚は意味ありげな視線を交し合った。そして二人うなずく。道彦は怪訝そうな顔をした。

「まあ秀吉が言うならそうなんだろうね」

「うむ。俺も同感だ」

「どういうことだ？」

当の本人を置き去りにして二人は再度うなずきあった。

藤原は一人別のことを考えている。カラスを連想させるあの黒ずくめの男の事を。

その後、手塚が神野山を中心として地上に描かれる星空の話を書いたが

つたので、道彦が簡単に説明してやった。岩の名前とその位置、対応する星の名前。結局彼はほとんどカレーを食べることが出来ない。全ての会話を絡むくせに一番食べるのが早いのはやはり手塚だった。

一通り知れたかった情報を聞き終えたと手塚は話を変えた。

「で？ 結局おまえらここで何やってんの？」

道彦は周囲を見回したが誰も答えようとしな。無言の圧力に負けて再び道彦が会話の相手となった。石の器がカレーを熱いまま保つのでまあよしとした。

「礼子のご要望にこたえ、村内のいわれのある巨石や神社を見て周っているんだ」

「へえ？ まあ観光みたいなものか？ しかしそんなのによく藤が付き合ってるな」

藤原がちらりと手塚をにらんだが手塚は気付かない。

「礼子が言うには、さっきの神野山の話もそうだけど、この山添村には巨石を中心として何か大きな謎のような物が秘められている可能性があるん

だとき。要はそれを解き明かす為にいるいろと回っているというわけかな」「なるほどな。普段仏頂面の藤が楽しそうなのはそういうわけか」

「勘違いするな。俺はそれほど興味があるわけではない。明日にでも帰っていいくらいだ」

既に一人食べ終わっている手塚が水を一口で飲み切った。深いため息をつき、藤原の顔をまっすぐに見据える。

「つれないこと言うなよ、俺らみんな友達だろ？ あいにく俺は今参加できないけど、だからと言ってお前らが喧嘩したら俺はボスとして悲しいぞ。せつかくの休みなんだから仲良く一緒に行動しろよ」

藤原はちよつと驚いたような顔をしていた。苦笑いのような照れたような顔をして礼子は無言のままカレーを口に運んだ。

「よし、じゃあ俺ちよつとこれから大事な用事があるから行ってくるわ！ じゃあまたな！」

手塚はすつくと立ち上がった。礼子と藤原はやつと食べ終わった頃だ。道彦はまだ三分の一ほど残している。一人料金を置いて手塚は店から出て行った。

「なんだあいつ？」

道彦はため息をついて店の出入り口を見つめていた。その横から礼子が彼のわき腹を数度つついてきた。「やめるよ、くすぐりたい。何？」

「あいつ追っかけよう。怪しい」

19

手塚はため息をついていた。自分に必要な情報を集め終え、意気込んで羽田有姫をデートに誘いにきたのは良いが、目当ての彼女がいると思しき店の前で余計なお荷物を抱えることになったからだ。

「へえ、ここが手塚の恋するお方の勤めるお店ですか」

礼子が腰に両腕を当てて言った。小さな店の入り口で屋根を見上げるようにしている。

「なんでついてくるんだお前ら」「礼子に言ってくれ……」

はカレーを食べ切ることは出来なかつた。

「七夕の話なんかいろいろ聞くから怪しいと思ったんだよ。ま、女の勘って奴？」

「帰れ」

「邪魔はしないよ。見るだけ」

店の前に停めた原付と軽自動車。藤原は軽自動車のドアにもたれかかり、腕組みをして静観している。こういうことは嫌がりそうなのだが、今はほんやりと考え事をしている。

「告白したらいいじゃない。いい感じなんでしょ？」

「ねんねちゃんの礼子が恋愛最終兵器の俺様にアドバイスとはな。少しは女を磨いてから出直してきな」

礼子と手塚は言い合いながら店の中へと入っていった。道彦は鼻息を一つつき、振り返って藤原に問いかけた。「兵器って……あいつそんなにモテたっけ？」

「知らん。確かなのは自爆ミサイルだということだけだ」

道彦は苦笑した。藤原が冗談を言うとは珍しい。

二人は店の外で待つことにした。二

人ともそれほど野次馬根性があるほうではない。

「いない？」

店内に手塚の素つ頓狂な声が響いた。他に客がいなかったためかよく響く。食料に日用品、店内には大概の物が揃っている。店主は気のよさそうな初老の男性だった。

「そんな店員おらんぞ。何か勘違いしてるんちゃうか」

「そんな……」

「おじさんはここでずっと店番をしてるんですか？」

礼子が一歩進み出て問いかけた。店主は丸い目をくるくる回して頷いた。

「家族で店番は変わるけどな。よその人に番してもらうことなんかせんぞ」

礼子を手塚と顔を見合わせてから小さく頷いた。

特に嘘をついているようにも見えなかつた。

しかしそうすると有姫は一つ確かに嘘をついていることになる。彼女はこの店の「店番をしていた」と言っていたはずなのだ。手塚は何事かを言いかけたが、諦めたように目を伏せた。

店の外に出て四人は再度合流した。礼子は飲み物を買っていた。店の主人に愛想良く礼を言って扉を閉める。

放心した様子の手塚を見て、外で待っていた二人も大体の事情を察した。

気まずい空気が流れる中、礼子が手塚の肩を叩いて言った。

「何て言う人？」

「……羽田有姫」

「羽田？」

突然羽田の名前に反応を示した藤原に注目が集まった。手塚は悲壮な顔つきで藤原に詰め寄った。

「何だよ藤。お前羽田さんのこと何か知ってるのか？」

藤原はしばらく考えたが首を振った。どこかで聞いた気はするが思い出せない。大体彼は必要の無い人間の名前を覚えるようなことはしない。

雲の動きが夏の割りにやたらと早い。

20

「道彦。どこか連れて行け」
夜になっていた。

四人を無理矢理に押し込めた小さな車の後部座席から力なく要求したのは手塚だった。しかしこのような田舎の山村では、日が落ちてから気軽に

行ける場所などすぐには思い浮かばない。高円山に登り夜景を見に行くという選択肢もあつたが、何となくそのような気分ではない。

礼子がシートベルトを締めながら言った。

「長寿岩を見に行こうよ。夜に見ればまた違う印象を受けるかもしれない」

長寿岩を安置するふるさとセンターは、夕刻を過ぎれば施設され一般の立ち入りは禁止されている。道彦は本来そういうルールを破ることを好まない。

「立ち入り禁止だぞ」

「意外に堅いのね、秀吉。別に私は遊びたいわけではなく……」

「だからあまり騒ぐな。ごみなんか捨てたら置いてくぞ」

礼子は何事かを言いかけていたが、微笑んで言葉をつぐんだ。

きつと彼女は手塚をなぐさめるためだと言いたかつたのだろう。

道彦は後部座席を振り返った。藤原

も無言でうつむき微笑んでいた。目を合わせることはしない。沈黙は時として雄弁だ。道彦は車を始動した。

ふるさとセンターの駐車場は夜でも強い照明が灯っていた。そびえる長寿岩がその光に照らし出され、暗闇の中で輝いている。

空は曇っていた。しかし長寿岩の真上だけはドームの屋根を開いたように雲が大きく裂け、そこから確かに瞬く無数の星々が見えた。

長寿岩は地中から掘り出されて後、たかだか十年ほどの時間しか経っていない。それでも長寿岩は過去数万年もの古より、人々の営みを静かに見つめ続けていたかのようには佇んでいた。

古代に生きた人々の知識は現代では多く失われているのかもしれない。だが一方で現代に生きる我々が知り、古代に生きた人々が知らなかったつまらない事実もまた多く存在する。今自分たちが立つこの地球が一つの巨大な球形天体であり、空に浮かぶ無数の星々と同じ存在であると知らなかった彼らにとって、星にもっとも近い存在だったのは地上に存在する無数

の巨石だったのだらう。この風景を見れば誰だってそう思う。数多の巨石は人がその地に根付くよりも遙か昔の贈り物。彼らにとって地上に落ちた星に等しい存在だったのだ。

礼子が長寿岩の前に立った。光を受けて輝く巨石は、彼女のための背景となった。踊る影絵が祝祭のように長寿岩に溶け落ちる。

道彦は長寿岩から少し離れた場所で、アスファルトの上に腰を降ろした。皆がそれに続く。藤原も珍しく地にあぐらをかいた。手塚はごろりと仰向けに寝そべってしまった。礼子も長寿岩の台座にもたれる格好でゆつくりと座った。

道彦が空に向けて指を伸ばした。「流れ星だ」

「え、私見てない」
照らし出された夜の長寿岩は昼間見るよりも更に雄大に見えた。

道彦はゆつくりと首を左右に振り嘆息してつぶやいた。

「巨石を星になぞらえて地上に星空を描くという話。正直半信半疑だったけど、これを見ればその認識も改められるな。古代の人にとって、巨石はす

なわち星に等しい存在だったんだよ」
流れ星を指で探しながら礼子が応えた。

「山添村の聖石密集地帯、布目と神野山に挟まれるように存在する北野天神社は、本来裏山に広がる天神の森に鎮座する磐座を御神体とした社だよ。その磐座はその名もずばり明星岩と呼ばれている。星と巨石とが有機的に結びついている好例だろうね」

全員が空を見上げていた。矛盾した言い方かもしれないが、長寿岩越しに見える限られた星空は、岩を発信源とする天然のプラネタリウムのようにも思われた。

誰も急いで会話を進めようとしないう。星を眺めるといっはそういっことだ。一人一人がぼつりぼつりと口を開く。

「星空はいいね。これだけは万人に共通する至福の時に違いないよ。ね、藤原」
「俺は空など眺めない」

そう言う藤原も空を見上げていた。そのまま礼子に視線を落とす。「だが、たまにはいい物だ」
珍しく二人は微笑みあった。地を叩く小さな音が響く。手塚が頭

のそばに転がる手近な小石を拾って空に投げた。

「羽田さんは……何か事情があつていなくなつたんだよね」

誰にも確かな答えなどできない。三人はお互いに顔を見合わせた。

「……うん」
ため息をつき、礼子が返事をした。

その優しい表情が闇夜に明るく照らし出されている。

「きつと羽田さんは帰ってくるよな」
「……うん」

普段饒舌な礼子もただ相槌を打つだけだった。手塚はごろりと転がり背を向けた。

しばらく四人は夜空を背景とする長寿岩を楽しんだが、その平靜は長くは続かなかつた。

「えい、お前ら黙ってるばかりでなく何か話せ」

手塚の直接的な要求に対し、困惑した道彦は礼子を見た。礼子も難しい顔をしている。話したいことは多々あるが、そのうちの話をするのが今回の接待客には相応しいのか、と考えるような顔つきだ。

「さっき星がどうのとか言ってただ

ろ。ついでだ。その辺の話で何かねえのか」

背を向けた手塚の表情はわからないが、視線は確かに星空を向いている。星にまつわる神話にかこつけて、意中の女性を口説こうとした哀れな一人の牛飼いが、星の話を求めるのは少し自虐の要素も含んでいるのかもしれない。道彦は微笑を浮かべ、礼子と目を合わせて話をしよう促した。礼子は小さく頷いた。

「明星岩を御神体として抱える天神社には美統(みすまる)神社という撰社があるんだけど、『みすまる』という言葉は本来、装身具の事で、沢山の珠を糸でつなげた首飾りのことなの。この『みすまる』は『すまる』という古語動詞の尊称名詞で、『すまる』は『集まって一つとする』という意味。この名を冠した有名な星団があるのを知っている？」

「すまる……？ 知らねえな」

「昂(すばる)よ。昂は単一の星の事ではなく、古来より六連星の異名を持つ、無数の星が集まった星団。実際には百三十ほどの星が集まっているんですけど、人の目に見えるのは六程度

の数ということね」

「昂か。そいつは俺の持ち歌だぜ」
「今度聞かせてね。」

天神社の中には明星岩と、美統神社、星にまつわる二つの名前が残っている。今でもこの山添村では、天の中に昂と明星、二つの天体を現す言葉が光り輝いている。なかなか綺麗な絵が浮かばない？」

道彦は星空を背景に輝く地上の天球図を思い描いた。確かにそれはなかなかいい絵のように思えた。

「ここで面白いのは、星団昂を意味する美統の名を冠したこの神社は、元々牛ヶ峰の春日神社をはじめとする五つの神社を合祀して出来上がった神社であるという歴史。神社の一つ一つを星になぞらえ、それに明星岩を足せば六つの星すなわち六連星の出来上がり……というわけよ。」

ちなみに私の知りうる限り、『みすまる』神社という名を持つ神社は日本中でここだけよ」

「戯言を」

視線を外した藤原だが、その表情は微笑んでいた。大言壮語も夢を孕めば鬼をも笑わすというあたりか。

「なんでわざわざ昂を表す必要があるんだ？」

一人自分の持ち歌自慢を流されていた手塚が藤原の後を引き取った。背を向けていては相手にされないと思つたのか、体を反転させている。

「清少納言の枕草子でも『星はすばるひこぼし。ゆうづつ』と書かれているように、昂は星空で最も美しい物と古来から日本では謳われていた。だからじゃない？」

手塚は大袈裟に首を捻った。礼子は微笑を絶やさな。いきなり振り向いて道彦に問いかけた。

「秀吉。この山添村では牛が謎解きに大きく寄与するキーワードだと言つたよね」

「……言ってたな、確か」

「昂はプレアデス星団という名称の方がポピュラーだけど、この星団は牡牛座の中に存在するのよ」

道彦は弾かれたように立ち上がった。予想もしていない角度からの攻撃だった。

そう言えば合祀された神社のうち、一つは牛ヶ峰の春日神社とか言わなかったか？ 磐座、明星岩を御神体

持つ天神社にこそ山添村の地上に描かれた天球図、その成立理由の謎を解明する何らかの糸口があるのでないのか。

「日本最初の百科事典、和名抄では昂は『須波流』あるいは『須波留』と書く。あたかも名張川を波に乗って登ってきた神、牛頭天王こと須佐之男が、神波多の地に留まった事を暗示するようにね……」

「おい礼子、まさか」

道彦が驚いて声をかけると礼子は朗らかな笑い声をあげた。それがあまりにも場の空気にそぐわなかったため、道彦はしばしあぜんとした。

「ごめんごめん、今の話は別に嘘を言つてはいないけど、残念ながら一つ穴があるの」

「礼子！ からかってんじゃないぞ！」

手塚が猛った牛のように鼻息を荒くした。

「本当ごめん、冗談のつもりだったのよ……。つまりね」

礼子は一息をついた。背後から立ち昇る気配から、今度は藤原の機嫌が少し悪くなっていることが道彦には

わかった。

「美統神社が五つの神社を合祀して出来上がったのは大正二年のことなのよ。だから天神社関係から浮かび上がる牛と星に関わる二つのキーワードからは、それよりも大昔に成立したと思われる神野山を中心とする地上の天球図の創設に関わる理由を見出す事は難しい、と私は思うわけ」

道彦はゆつくりと座りなおした。事はそう簡単には運ばない、ということだ。十分に分かっていたつもりだが、自分の浅はかさを彼は自嘲した。

「ただ」
外れた視線を再び集める能力が、礼子には備わっている。

「大正二年にその合祀に関わった人間が、牛と星、その二つのキーワードを強く意識して美統の名をその神社に与えたという可能性は捨てられないよね。私はそう信じたい。百年ほどの昔にも、この山添村には清少納言に劣らない、風流な人間が確かにいたんだということ」

礼子が再び宙を指した。長寿岩から放射される幻影が、夏の夜空を静かに彩る。

「戯言はその辺で終わりか、天野。そろそろ俺の疑問に答えてもらおうか」
静かだが熱のこもった礼子の話を藤原はただ一言で断ち切った。礼子は微笑んで藤原の顔を見返した。不思議なことに彼女は藤原のそういう態度を厭うことなく、むしろ歓迎しているふしがある。

21

深夜の高速道を走るメルセデスベントツ。黒光りするその車体が、無数のオレンジのライトの光を一本の軌跡のように映し出していた。

運転席には黒くくめの黒田。夜間にもかかわらずサンングラスは外さない。後部座席には物憂げに流れ行く夜景を眺める一人の女性。羽田有姫。

「黒田」
「は……」
「宿に荷物を置き忘れました」
「既にご実家に送りかえしていただけるよう手配済みです」
「車を壊してしまいました」
「ご承知しています。念のためそちらもご実家に」

「そう……」
にべもない。当然のことながら黒田には、有姫があまり帰りたくないと思っていることくらいはわかっている。

「黒田」
「は……」
「お父様が本当に帰って来いと言ったのですか？」
「はい」
「なぜ」
「お伺いしておりません」

言葉ができる限り短く。黒田には有姫との会話その物を避ける心理も働いていた。

「お父様はこの夏の間だけは私に自由にしていいと仰ったはず」
「事情が少し変わったようです」
「どういう事ですか？」
「私の口からは」

実際は黒田の雇い主、羽田有姫の父富久治は「すぐに帰って来い」などとは一言も言っていない。だが娘が出て行ったその日から、見た目にはつきりとわかるほどに富久治は憔悴した。コンツェルンの総裁として裁断を仰がねば成らぬ事態も一度や二度ではなかったが、それどころではなかった。

——娘はもう子供ではない。自分の判断で行動してもよい頃だ。
口ではそう言うが実際の本心は別の所にある事は、黒田ならずも周囲に侍る者ならば容易に見て取ることが出来た。

今回の件に関して黒田は全て独断で動いていた。目的地も告げずに家を飛び出した有姫。周囲の親しい友人にもらした「山添村に行きたい」という願望をやつとのことで黒田はつかんだ。そこに何があるのかを黒田は知らなかったが、山添村に親しい知人がいるわけでもない有姫を探す為には、村内の名所を順に探すしかなかった。そして結果それは正しかったのだが。

複雑な親子の感情に他人である自分が立ち入る事は本来望ましいとは思わない。だからこそ黒田は迷う。しかしその様子はおくびにも出さない。意図的に無慈悲にならないと、娘をあるべき場所へと戻せなかった。
短い会話は黒田の意志。
一台の車に抜かされた。決して急いでいるわけではない。
車の速度は黒田の迷い。
有姫はあきらめてシートに深くも

たれかけた。

ふとあの村で会った手塚のことを思い出した。好ましい人物と思いきそしていたが、別に彼女は手塚に対して友人としての好意以上の物は特に持つていなかった。

しかし約束がある。自分はこれを最後にいよいよ家を出ることが難しくなるだろう。そうすればもはや謝ることすらできなくなるのだ。

彼女は意思を強く瞳の中で結んだ。運転席のヘッドレストをつかむ。

「黒田」

「お嬢様。そのような振る舞いは」

「どうあつても、もう一度山添村に戻つてもらいます」

黒田はちらりとルームミラーの中の有姫を見た。有姫はまっすぐに黒田の目を見ている。

しばらく思索し、黒田はため息をついてウィンカーを点灯させた。

22

「以前も言ったが、ほとどの地域においても複数の磐座を有する山添村において、切幡地区においては磐座ど

ろか、奇岩や巨石の類すらもほとんど存在しない。これはなぜなのか？」

藤原の問いかけに対して、礼子の反応は足元の小石を指先で転がすのみだった。傍目には話を聞いていないようにも見える。藤原が更に何事かを言いかけた時、礼子が答えた。

「過去に取り除かれたのでしょうかね」

「ではその理由は何だ」

藤原が右手の指先を地につけた。

「確かにこれほど巨石の多い山添村にも全く巨石が存在しない地区があることはわかった。そこにも元々巨石は多数あつたかもしれないが、過去に取り除かれてしまったとお前は言う。問題はその理由だ。なぜ過去そこに住んだ人々は自分たちの土地から、それこそ根こそぎ巨石を撤去しなければならなかったんだ？」

低い声だが、その口数から藤原の興奮が見て取れる。言い終えた藤原はため息すらついていた。

礼子は指をすつと上に伸ばした。最初空を指しているのかと思つたが、礼子は自分の背後に佇む長寿岩を指差していた。

「山を切り開き、道を作り……人の住

む土地はどこまでも広がる。残念ながら多くの人間にとっては、土地を広げるとき巨石はただ邪魔なだけの存在でしかない。今も昔もそう変わらないうのでしょうか。古代の山添の民……特に現在の切幡地区に過去住んでいた人々の一部にとって巨石は自分たちの信仰の対象でも何でもなく、台風の後倒木に等しい存在だったんだと私は思う。

彼らは自分たちの生活にとって必要な当然のことをした……。罪の無い行動よ。何をしたのかは改めて説明するまでも無いよね。私たちは現代においてその破壊の再現が、この長寿岩で行われていたことを知っている」

長寿岩は、出土した際『台座』となる部分の巨岩が爆破されている。道彦はうなずいた。藤原は釈然としないまでもひとまずうなずいている。だが礼子は藤原の疑問に対する答えを結ばなかった。

「ただ、今話したのは現実的な解釈の上での話だけだね」

「お前にしては至極真つ当な説明だと思つたのだが」

「戯言を許してくれるかな」

「聞き飽きた。話せ」

藤原はいつの間にか腕を組んでいる。いつもの彼のスタイルだ。礼子は一度笑顔を見せた後、自らの仮説のうち完成している部分を語りだした。

「切幡には確かに磐座は存在せず、古い信仰を示す物は神明神社くらいだね。神明神社というのは全国的に存在するけど、明るい神の名が示すとおり、太陽神天照大神、あるいはその別名であるオオヒルメノミコトを祀る神社のことなの。つまりそのほとんどが伊勢神宮の系列。この山添村に存在する神明神社もその例に漏れない」

提示した疑問とは、一見まったく関係の無い奇妙な話から、論理の組み立てをする礼子の癖を彼らはそろそろ見抜いていた。ただ黙ってその論理に耳を傾ける。礼子はうなずいて続けた。

「磐座ないしは自然を信仰する古い形態の神社では、そのほとんどが国津神、すなわちスサノオから始まる国作りの系列の神々を祭神としているの。

一方、天照大神に始まる天津神を信仰する神社のほとんどが、立派な社そのものに神を迎える形式。多くは伊勢神宮遥拝所を伴っている。

この二つの事例は日本全国津々浦々、どこに行っても見ることができると思う。多少のノイズは入るかもしれないけれど、サンプル数が多くなればその傾向は明らかのはず。すなわち

国津神から天津神への国譲りの日本神話そのものよ。磐座信仰に代表される自然祭祀形態は、後に興った社殿や鏡などの祭器を拝む様式に取って代わられたんだと思う。切幡の神明神社には磐座は存在せず、社に神を迎える形式。そしてこの神社の前を流れる川の名前は天津川。

はつきりと言うならば、山添村に存在する神社群のうちの幾つかからは、自然物を崇拜していた土着の民の信仰を奪うために、後から来た天津神の信仰を上書きしているような印象を受けるのよ」

道彦にはまだ礼子の話がどこに帰着するかわからない。藤原の横顔を盗み見たが彼も眉をひそめていた。礼子は左手を一度空に向けた後、藤原と道彦の間に向けてゆつくりと降りた。

「ゆえに『なぜ山添村南西部、特に切幡地区においてほとんど巨石が存在

しないのか』という最初の問いに対する答えは、『切幡の地名は何を表す地名なのか』という簡素な問いに対する答えと等しい。これが今現在の私の結論

道彦も藤原も唸った。
「切……幡か」

磐座を信奉する国津神の長、スサノオこと牛頭天王。

これはまさしく波多の天王の命脈を絶つ名前に相違ない。山添村において波多の天王を祀る時、磐座を祭祀の中心に据えるのがその方式の主流ならば、その信仰を妨げるには磐座を否定することから始めるのが最も早い。

「誤解しないでね」
礼子は笑って言葉が続けた。

「例えばの話、私は伊勢神宮も好きよ。神宮自体、岩石祭祀を軽視する事無く、その要素も確実に取り込んでいるしね。別に両者の関係を二千年も経った今になって煽るつもりはまったくないよ。今現在、それらは確かに共存することに成功している立派な文化だし。これら二つの勢力の競演は、この

日本が世界に誇れる美しい芸術だと私は思う」

藤原が目を見せて微笑んだ。

「なかなか面白い話だ。天野」
珍しく藤原に褒められて礼子は照れたように頭をかいた。

「幡を切るか……」

突然手塚が口を開いた。珍しく何かを思索している様子であったが、その

内容が口に出す事はない。道彦達には、彼が切幡の地名に対し何を思っていたのかは分からなかった。

藤原が礼子に続けて問いかけた。
「天野。まだ最も大きな疑問が残っているぞ。明日で期限の三日目だ。結局

お前は神野山の天球図、その創設理由に何らかの説明はついたのか？」

まっすぐに礼子の顔を見据えている。先程空を見上げていたときの幾分

柔らかい表情は姿を消し、彼は普段の顔に戻っていた。

礼子はちらりとそちらを見た後、もう一度だけ空を見上げた。星の数は随分と減っていた。

「さあね……。藤も手塚もそう焦らな

いで」
風が出てきた。真夏の夜が更けてい

く。
道彦は改めて空を見上げた。

雲がその厚みを増し、わずかに開いていた天空のゲートがゆつくりと閉じていく。心なしか長寿岩もその輝きを失くし急速に眠りに就くようすら見えた。

道彦はずっと黙っていた。彼の脳裏には、この山添村に来る事になってからずっと、空を飛来する翼持つ人のイメージが繰り返し再現されている。その翼持つ人の顔は、天狗ではなく猛る牛。彼が謎解きのキーワードとして牛を挙げたのはそのためでもあった。予兆と言いつてもいい。

四人は自然と立ち上がった。
「帰ろうか」

礼子が足元を払って穏やかに号令した。

動き出すと空は早い。一面の雲に覆われた夜空はただ一つの星も見えなくなつた。夜がその全貌を明らかにするのはまだ早い。垣間見えた謎の一端は消え行く瞬きと共に、再び暗い空の底へとゆつくりと沈んで行ったかのようにも思えた。

七夕の日が近づいていた。

——『大地の星、天の磐』続く